

ギャラリー

萩



オーナー夫妻 下口 進・麗子さん

ギャラリー 萩
石川県加賀市大聖寺下屋敷町ホ8
TEL/FAX 0761-73-2714

ギャラリー萩10周年記念

「北出不二雄小品展」

2007年9月7日(金)～17日(敬老の日)

午前10時～午後6時

「萩いろいろ 萩づくし展」

2007年9月21日(金)～30日(日)

午前10時～午後6時



ギャラリー萩の10年

下口豊子

物事の始まりも終わりもどこかで人知を超えたところでなされるに違いな
いとこの頃思うようになった。たいし
た努力もなしに私がギャラリーを開く
ことができ、しかもそれが10年も続い
てきたのはそのタイミングに乗ること
ができたからだ。

11年前のある日、当時住んでいた家
が加賀市の道路整備計画に懸かり、年
内のうちに家の切り取り改造を余儀な
くされた。家の大改造をしなければな
らないのならギャラリーでも造ろう、
ふっと閃いた思いが形になったのはま
さに天恵とは思えない。

夫が古九谷の窯跡のある九谷村で生

まれ育ち、大聖寺で古九谷を核にした
まちづくりに関っていたこと。その影
響で私も九谷焼作家の人たちとの交わ
りが深まっていたこと。四人の子供た
ちの子育てに一応の区切りが見えて、
専業主婦だった私も何らかの社会参加
をと思い始めていた時期であつたこと。
ギャラリーを開くことは自然の流れだ
った。

その上、たまたま倉庫に九谷ダム建
設によって立ち退きを余儀なくされた
義父の土蔵が、もちろんきちんと解体
され積んであつた。

「あの蔵をギャラリーにしよう。中途半
端な建物を建ててもしかたない」

夫のアイデアを受けて義父はこの蔵
の再建の陣頭指揮を執ってくれた。無
垢の栗が、柱や梁、壁板に使われた空間
が出来上がった。一歩足を踏み入れる
誰もが感嘆の声をあげた。義父が自ら
山々を歩き苦勞して建てた蔵が、場所
を変えて蘇りたくさんの人に喜んでも
らえるギャラリーになった。

オープン記念展を見届けた次の年の
春、義父はこの世を去った。ギャラリー
は夫に残された形見でもある。

我が家が実性院の前にあつたことが、
ギャラリー名「萩」の由来だ。歴代の大
聖寺藩主の菩提寺であり、山ノ下寺院
群の出発点でもあるこの寺は、先代の
住職から参道に白萩を植え、手入れを
続け今では萩の寺として多くの観光客
が訪れている。

野や山に自生して、秋になると素朴
で可憐な花を咲かせるこの花に私は惹
かれていた。小さい花なのに大きく広
がり枝を伸ばし、静かな存在感がある
この花を迷わずギャラリーの名前にし
た。北出不二雄先生に文字を書いてい
ただきそれをロゴにした。天井にスポ
ットライトを取り付け、藍染めののれ

んも出来あがり、ギャラリー萩は小
な一歩を踏み出した。

いつのまにか時が流れ10年が経った。
再び北出先生が記念展を飾ってくだ
ることになった。昨春秋亡くなった私
の父と同年八九歳。術後作陶はなさ
れないが、本を読み書の研究をし、時に
スケッチに出かける。

今回は小品の展覧。先生の色紙も人
気だ。もしかしてこれが最後の個展に
なるかもしれないと先生も思い、ご家
族もお弟子さん達も思い、私も密かに
思っている。だからこそいい個展にし
たいと、心から願っている。何年も昔大
阪のデパートで初めて北出不二雄展を
観た。会場に漂う肅然とした気品と、深
い寂寥感に打たれた。作品は作家その
ものだと知ったのはその時だった。

そしてこの10年で縁のあつた作家四
十六名に参加してもらうことになった
「萩いろいろ 萩づくし」ははじめての
企画展だ。テーマは萩。陶芸・漆芸・染色・
ガラス・銀細工、どのような展開になる
のかいまだ未知数。それが今私をわく
わくさせてくれている。